

中国・雲南の植物を訪ねて

橋 本 光 政*

中国の雲南省は中国の西南部に位置し、その南にはラオス、タイがあり、西にはビルマが接している。緯度はその省都の昆明市で北緯25度。ほぼ台湾と同じである。緯度的には亜熱帯圏に属している。しかし、雲南は海拔1900m以上にあり、日本の植物との関連は極めて強く、ヒマラヤから中国の揚子江沿いに日本に続く日華区系の中心をなすともいわれる。

今回の旅は京都植物の高木俊夫先生が企画された「中国・華南の植物研修団」に参加させていただいたものである。

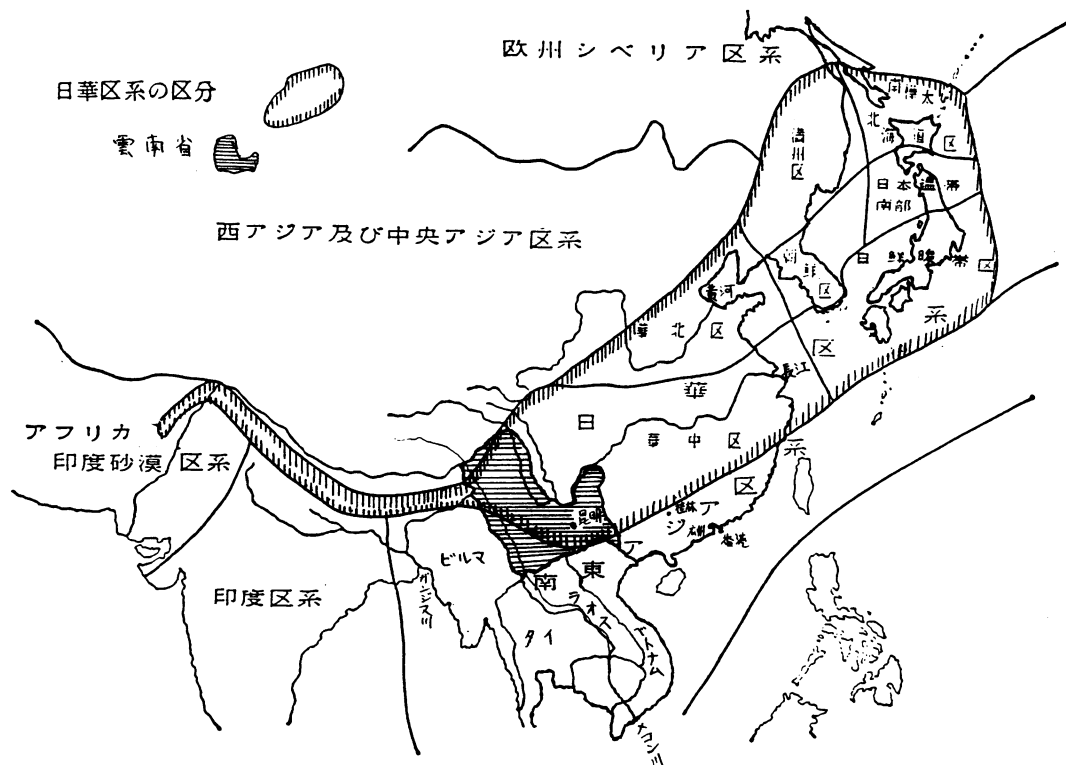
8月17日 伊丹発、香港市内見学後、広州に入った。白雲賓館泊

8月18日 朝、ホテルの7階から眺めた広州の市内は香港のビルの林立とはちがいが、高層建築は数少なく、広々として市街地が広がっていた。まだ、朝早いのに自転

車の往来が多い。

朝食は予期していたように薄いお粥が主食のようだ。もちろん、外人向けのホテルであるため、副食が多く出て、我々日本人にはそちらが主食となってしまう。

貸切バスは日野ディーゼル、日本車であった。ガイドは大学の日本語学科卒業の秀才。日本語の発音は鮮明で、話す内容も隠すことなく信頼できる。時々、高木先生の解説も混じえながら、広州駅前を通り、バイパス工事(高架)のそばを抜けて、一路郊外の華南植物園へ向かった。車は思ったより多く、中心部では渋滞気味である。街路樹がすばらしい。葉の細いユーカリが多い。樹皮は部分的に削げ落ち荒いサルスベリ状。双思樹もある。樹高は高くないが、羊蹄紅とかカントンザクラという Tabebuia。モクマオウもある。カシ類の葉に見えたがフトモモ科のものであったか？



*兵庫県立姫路西高等学校

ポニーぐらいの小型の馬に引かせた馬車が多い。いろいろな荷物を運んで車と同じ車道を走っている。車は右側通行である。

中国科学院華南植物研究所は東経 113 度、北緯 23 度、海拔 20~327 m、面積 172 ha。バスのままゲートを通り迎賓楼横で下車。お茶をいただきながら葉玉燕さんの解説を聞いた。その後園内見学に入った。九州大学で松岡さんと一緒に学んだことのある華南農学院大学講師の郭麗簾さん、歯科系大学で京大に留学したことのある院生も一行に加わり散策にまわる。園内は大きく、11の植物区に4000種の植物と付属研究施設などがあり、160人の公務員と50人の研究者がいるという。広大すぎて廻ったのはシダ、温室、ランなどのコーナーと萌生林区などで、わずか2時間では全貌もつかみかねた。また園内の樹木は全く見当のつかない亜熱帯から熱帯に続くものが多かった。

昼食が市内の広州酒家のため再びバスで帰らざるを得なかった。中国第4の大河、珠江の水は濁り沿岸道路には長く気根を垂れた榕樹(ガジュマル)の街路樹が続いていた。

午後は広州一の南方玉石掘石工場、広州で一番古い光孝寺の見学。光孝寺の庭ではインドボダイジュ(Ficus)の大木を見、中国式便所などに感激。広州欄園ではコンダにそっくりなのだが、最下羽片の違うこと、Plumeriaのラッパ状花、ガイドは軍人木というキバナノキョウチクトウの花や果実など、熱帯圏に続くキョウチクトウ科の樹木が多かった。

夕食後、中国民航で昆明へ発つ。窓の下には蛇行した大河を見つ、雲南省最大の昆明湖(滇池)の上から高原都市昆明に下降、それに合すかのように日も暮れた。宿は翠湖賓館。クーラー、冷蔵庫はなく、窓に網戸があるだけ。しかし、暑くはなく快適。

8月19日 ニワトリの鳴き声で目を覚ました。7時、まだ外は暗い。北京を標準とした時刻のため、日没、日の出ともに遅い。

昆明植物研究所の蘇志雲先生と陳介先生を加えて石林見学に発った。石林の植物を案内いただけるという。有難いことである。

市街も郊外も道路という道路は全て街路樹がすばらしい。多いのは市内では銀樺樹(シノブノキ)、ユーカリ(広州のものより葉が広い)、スズカケノキ、ウンナンポプラ(ドロノキに近い)。郊外ではユーカリが多く、イヌエンジュ状のマメ科やシダレヤナギなどもあった。ここも、広州の郊外と同じでトラックが多い。新しいものには日本車もある。トラックに負けじと馬車も走っている。

朝市にはすごい人出だ。売る人、買う人、自転車や馬

車で、また天秤棒でかついで集まっている。また、ほとんどの人が上着を着ている。人民服、軍人服に混じて背広の人もある。昆明は春城ともいわれ、年中おだやかで、暑さ、寒さのない町という。亜熱帯にあって海拔1900mのなせる業である。

水田はほとんどがイネ(長米のインディカ)、畑地にはトウモロコシ、ヒマワリ、ソバ、ナス、サトイモ、レンコン、キャベツ、トマト、タバコ、クワイ、ハヤトウリなどと品種は違っても日本と大差はない。

高い山はなく、無限に続く丘陵はラテライト(紅土)の地肌を見せ、また、丘頂までソバの栽培が続いている。行程3時間の中間に湖畔の休憩所があり、お茶にクルミとピーナツのサービスを受ける。クルミはめいめいがほしだけクルミ割り(木製の槌と受け皿)で割って食べる。

ウンナンマツの林であろうか、下部の枝は全くない。貴重な燃料源となるそうだが。広葉樹林はほとんどなく、わずかに Quercus(クヌギ類)か Alunus(ハンノキ類)らしい小高木林が見られたにすぎない。農家は土壁に瓦葺きが多く、数十軒が集落をつくっている。ところどころに煙が登っていたが、燃料のせいか青紫色が濃い。

石林に近くなるに従い石灰岩の突出したカルスト地形が多くなった。石林では長米の御飯に7~8品の料理、飲み物も中国産のビールかジュースと豪華な昼食を終え、2時間の散策。もと海底でサンゴが作った石灰岩が、隆起後雨や地下水に浸食されてできた奇観。不思議な自然と美しく林立する巨石群はまさに圧巻である。グループから離れると全く方向を見失ってしまう。種名こそわからないが岩の裂け目に根をはったイタビカズラ、小さなくぼみに Arisaema、底部の土壌層からはムクロジ(土着のサニ族はネラマといった)、シナノガキ状の果実をつけたカキ Drosypros lotus(研究所の陳さんは目録を開いて教えて下さる)、Boodrea 小さなフジツツギ、その他、ササクサ、イノコズチ、ニガキ、キツタ、ヤマグワ、アマチャヅル、ホタルイ、ヤマノイモ、ナツツタ、ゲンノショウコ、シロバナセンダングサ、エノコログサ、タンポポ、ズミなど、日本の植物と同じか極めて近い。昨日の広州の植物とは全く異なっている。

石林の周辺は少数民族のサニ族の生活圏とあって、民芸品や生活物資(トウモロコシ、各種穀類、いろいろなキノコ類など)を売っている。散策中も2人の女性が刺繍の入った小さなカバンを「5つ10元、1つ化石サービス」と数少ない日本語をたくみに使って売りつけてくる。サービスの化石に釣られて土産品とする。化石は研修団の最長老で保育社から岩石図鑑を出版されている益富寿之助先生によると、デボン期のアトリッパー Atrypida sp.(腕足類)ということだった。

帰途も同じ道を帰った。道路端には時々キノコやナシを集めて売っていた。また、丘陵をゆっくり進むビルマ行きの列車にも出会った。

昆明のホテルで夕食後、高木先生の案内で市内散策に出た。一枚余分に長そでのシャツを重ねて。昆明百貨商店で一風変わった縄飛びと世界の童謡カセットを買った。道路の一つにいろいろと夜店がならんでいた。肉、果実、ラーメン類、豆腐類、ジュース類、本屋と、何でもある。種類はわからないが小鳥の丸揚げ、スイカ、煎栗を試食してみた。素朴な本物の味と満足。

8月20日 午前中、中国科学院昆明植物研究所と付属植物園の見学であった。応接室で所長さん以下、陳先生、蘇先生、その他の研究員の方々の説明を聞く。4部門からなり、360人の研究者がいる。標本館は3階建てで、80万点、その内68万点は種子植物という。益富先生方は植物化学部門へ、一行の大部分は分類地理部門の Herbarium の見学をさせてもらう。鉄筋のりっぱな標本館である。標本庫へは下履きでは入れない。スチール製の標本箱が整然とならんでいる。整理中の標本も机上に多く積んである。Genus カバーもしっかりとしている。1例を見せてもらおうと Camellia 金花茶と書いて、その場所に行き、標本の写真を撮らせてもらった。

付属植物園は道路を越したすぐ前にあった。(研究所の裏にもあるとのことであったか) エビネを思わせるユリ科の白い花が樹木の下にたくさん咲いている。刺状鉄線で囲まれたコーナーの入口には大きな番犬がいた。その奥を見ると何本ものツバキの枝に鉢置き台を作って接ぎ木がしてある。雲南省はツバキやシャクナゲの宝庫ともいわれ、珍しい種類が多いはず。最近日本にも贈られた金花茶という黄色のツバキかも知れない。興味津津柵に沿って歩いていくと紫袍という名札がかかってやはり接ぎ木がしてあった。切られた枝もあり、その枝には記号の札が下がっていた。金花茶でなくても貴重なツバキらしい。

その隣には、池のある栽培園があり、門はロックされていたが、蘇先生の一声で中も見せてもらえた。池にはヌマトラノオ、湿った草地にはイヌスギナ、マルバハッカ、イヌナズナ、畑地にはキイロキツネノカミソリ、晩香王というユリ、ホウズキに似た Sorana?, ヌマスギなどを楽しんだ。

中国の昼休みは3時までという。午後のバスも3時出発となった。時間があるので松岡さんとホテルの前にある翠湖公園に入ってみた。いくつかの大きな池があり、中国独特の彫り物のある建物、遊園地などもあるようだ。若い二人のカップル、子供連れ、老人グループとそれぞれ昼の憩いの場であった。藤棚の下に30人ばかりが集まっている。4~5人が簡単な三味線を持って歌い、中央に

は男女一人ずつが言葉を掛けあいながら歌劇風に舞っている。昔から伝えられた中国古来の舞曲であろう。1人の少年が池端で1mの竹竿に1mの糸をつけ、その先にトンボを結んでいる。池面にトンボが飛来してくるとその竿を廻し始め、一瞬の内に1匹のトンボをつかまえた。

午後の最初は全てが銅でできた金殿であった。いくつも山門があり、社叢林は植林されたものと思われるがよく保存されていた。元東大の故前川先生の報告ではマキの純林とあったが、大きな球果をもった Abies モミ類や Quercus クヌギ類も混生していた。山頂の裏にはアカマツの二次林状にウンナンマツであろうか、林床にはネコハギ、クマツヅラ、カワラケツメイ、ツユクサ科の小さな草本、フジカンゾウのさらに大花種など、やはり日本と馴染が深い。また、本殿横にはラッパイチョウがあり、少し奥にはコヤスノキ(種は違うかも知れないが Pittosporum ではある)そっくりの小高木があった。果実に明らかな総果柄があり少し小さい点に疑問をもちつつ標本を2枝持ち帰った。

その後、明日の山へ十分時間を当てようと大観樓に行った。飛行機から眺めた滇池の端にあるという。運河を船でも行けるが、バスで入った。湖水は透明とはいえないが、ラテライトによる濁りはなかった。

夕食後、また、夜の市街散策に出かけた。昨夜、場所を確保しておいた昆明中約店に入った。右半分は漢方、左半分は新薬コーナーであった。漢方薬の材料にはいろいろとあり、初めて見るものも多い。冬虫夏草、蛤蚧(トカゲを大きくしたもの)、黄蘗、桂皮、人蔘……である。話の種にと活性蔘50gと紅蔘50g、それに蛤蚧を買うことにした。蛤蚧はこわさないよう持ち帰りたいたので箱に入れてほしいといったのだが、箱が小さく、手足と尾の先は使用しないので切り捨ててもかまわないと何回もいってくる。完全とか学校で使うとか筆願するが通じない。やっと標本と書いたらわかってくれ、よりきれいなものを選んで包んでくれた。

8月21日 今回の中国旅行のメイン・イベント、山登りの朝である。6時30分に目が覚めた。外はまだ暗闇である。しかし、公園からはときどきするとい気合が聞えてくる。話に聞いた中国大極拳の練習らしい。着替えて門に出てみると、菊谷さんがタクシーを頼んでいたが来ないと困っている。二人で公園に入ってみた。やってるやってる何も持たずに型だけの人、大きな剣を持っている人、いくつかのグループがあちらでもこちらでもちょっとした広場集って稽古に励んでいた。別の広場にはさらに多くが集って一風変わった体操をやっている。日本のラジオ体操とは違って柔和な舞いを踊っているようでもあった。実に健康的である。

小哨の山へ登る手前で、バスは大きな工場内の通行禁

止の道を通ってしまった。出口のゲイトに番人がいて、運転手にカンカンになっておこっている。運転手もガイド嬢（黒龍江出身で大学では日本の古典文学を専攻したという。徒然草や枕草子の文頭をすらすらと暗誦して聞かせてくれた。）も初めてで道を知らなかったという。さいわい研究所の蘇先生が下りて話を付け、無事登山口へ着くことができた。

小哨の集落は海拔2200m付近にあるのであろう。少し登った地点で振り返ってみると、のどかな農村風景が広がっていた。丘陵面は多くが畑地にされ、畑地でないところは石灰岩の露頭が多く、乳牛、肉牛、ヤギの放牧に利用されているようだ。足元を見るとあるはあるは、紫色のマツカゼソウ、草色の大花をつけた *platantella* に近いラン、ヤマハハコ、ウスユキソウ、キガンビ、ヒメカラマツ、マンテマ、ルリソウ、白花の散形花序をもったセリ科、ハナゾノツクバネウツギを思わせる *Abellia* などと日本の植物によく似ている。草丈60cmぐらいのトリカブトの仲間が紫色のかわいい花を数個つけていた。蘇先生に聞くと *Delphinium* 飛燕草（ヒエンソウ）と筆答された。メギ、コトネアスター、フウロソウ、カタバミ、ガガイモ、つる性のツクサ科らしいものもある。基盤が石灰岩で高木はなくウバメガシ状の *Quercus* が1~1.5mの高さで岩の間をうめている。他にアカガシに似た低木も混じっている。尾根はなだらかな草地をなし、ネジバナ、ミヤマアズマギク、タカネヨモギ、イシモチソウ、キブネギク、ウスユキソウなどの近似種が点々と花をつけている。1株だけシャクジョウソウを見つけた。色は少し濃いがそっくりである。岩の割れ目に枯れ葉が溜り *Arisaema* の2種が葉を寄せ合っている。全ての植物が日本のそれと縁深い関係を見せてくれる。初めて見る植物のほとんどが何科の何の仲間かが見当がつくのである。暑くもなく、寒くもない、風はほとんどない。柔らかい日射しの下で明るいカルスト地形が遠々と広がっている。この山だけで今回の中国旅行は満喫できたとさえ思った。

下山すると、民家の近くにはナワシロイチゴ、ハタザオ、クコ、ソクズ、オオバコ、ヨモギ、オナモミ、アサガオ、シュウメイギク、アカソなど馴染の人里植物ばかりである。何族かわからないが我々一行が珍しいとみえて、大人も子供もぞろぞろ集ってきた。自然の中で生活し、誰を見ても天真爛漫な顔で微笑んでいる。文化の遅れはあるものの人間の幸せな生活とはこのようなものではなろうか、と心を洗われる気持ちにもなった。

昼食後は昼休みなしで、ガイド嬢のすすめる昆明飯店に寄った後、西山森林公園に入った。まず、500年前の建造という華亭寺、山門、仁王門、金色の大仏、その裏には観音菩薩、壁には羅漢の様々と見ごたえがあった。

庭には *Magnolia delavayi* 山玉蘭というモクレンが雄大な果実をつけ何を見ても古い歴史を秘めて中国らしい。

更にバスを進めて龍門口である。途中の山腹にはクヌギ状の森林やマツ林、モミ類の林などが広がっていたが、雨が降り始め、カーブが多くて車窓からは写真が撮れない。終点からは傘をさしての登りとなった。石灰岩をくり抜いたトンネルをいくつかくぐって、いくつかの礼拝堂を経て龍門と彫られた門をくぐった。下には90度近い絶壁となり、霧にかすんだ瀟池が広がっている。岩壁にもどうして彫ったのかと想像のつかない彫刻もある。垂れ下がった植物にイワギリソウ？、掘ってみて初めてわかった球根ペゴニア、ホウセンカに似た黄花のツリフネソウなどが見られた。

8月22日 昆明での最終日。荷物整理を終え、朝食後、昆明からは西へ16kmの筇竹寺^{きょうちくじ}へ向った。昨日からの雨は小雨ながらもまだ続いていた。山門をくぐると両側に大きなスギ（柳杉？）があり、日本の寺院と似た感じである。但し、本堂の中は中国独特の仏像や羅漢があり参拝者も多かった。羅漢には文官、武官、老人、少年……と様々で五百羅漢としても有名という。その裏山や前山が照葉樹林であった。一本一本がよく伸びて枝張りが比較的少ないせいか林床が明るい。葉をみると *Castanopsis* シノキの葉によく似ている。果実はコジイ状や *Pasania* マテバジイ状など1種だけではない。高木先生が「これだ」といわれたのはクリカシ *Castanopsis orthacantha* である。参加者全員が集って下枝を引っぱる。果実のなった枝に順番に焦点を合せた。葉はシヤカシに似て常緑である。果実は *Castanea* クリのように総苞に包まれ、外表は太い刺が集っている。熟すとクリのように総苞が裂けて中からシバグリ状の種子が3~4個出てくる。シヤカシは種子は1つだからむしろクリに近いことになる。残念ながらも手届く付近にはなく食べてみる数がなかった。しかし、土地の人はやはりクリと同じように拾い集めて食料にしていると聞く。まさに照葉樹林の古里、落葉樹林文化の発祥の地とっていいのかも知れない。雨のため道路端を歩いたが、少し遅れたため裏山に入られた村田、清水両先生の話ではツバキがあったという。恐らくサルウィンツバキという種であろうか。道に沿った山裾にはシャシャンボとイワナンテンの中間のような種、ズミ、*Dioscorea* ヒメドコロ？、変わったツクサ科の1種、*Polygonum* イヌタデ？、オトコヨモギ、シュウメイギク、アカバナ、ガンクビソウ、アオノクマタケラン、キンシバイそれにシダにもホテイシダ、アオネカズラ、シノブなどによく似た種がほとんどであった。そしてまた、故前川先生の登場である。古赤道説の証物品ドクウツギがあった。即ち、もとその昔、熱帯であったか、その周辺の高地で植物分化の多彩な地であ

ったという推測ができるという。昆明での最終日もまたまた楽しい1日であった。

ホテルに帰って昼食。特に依頼したサトイモ科の花軸料理（蘇先生によると芋興花）の他、鮮松茸、エンドウとハムの炒め、ニラ・肉炒め、水ギョウザ、野菜・キノコ炒め、野菜スープ、梨とこれまた最後まで楽しい料理でもあった。

少し休んで、中国民航で桂林に着いたのは18時30分、まだまだ明るかった。空港の背景には写真や映画でみた桂林そのものの山並があった。宿に着いたが連絡の手遣いか荷物も夕食の準備もない。夕食は急遽、榕湖飯店で取るようになった。荷物は3時間程遅れて他のホテル経由でやっと届いた。優秀なガイドも添乗員も困りはてていた。しかし、こんなことはめったにないという。

8月23日 甲山飯店から市内を通過して漓江下りの船着場まではすぐであった。昆明とは違って桂林からの漓江下りは中国観光のハイライト、市内には豪華なホテルがいくつもならんでいた。9時30分といってもまだ霞にかすんだ早朝、太陽も低い。何十艘かの船がならんでおり、すでに下っている船もいくつか見える。我々一行23名と他に数名の日本人、他はギリシャ人が23名。陽朔までの83kmの旅立である。川の水は紅土による濁水ではない。少しのにごりはあるが川底に生える水草は見える。川岸には堤防がありサイカチ状のママ科の樹木、クスノキなどが植えられている。水牛が水中に頭を突込んで水草、セキショウらしきものを食べている。アヒルが放し飼いにされている。人が川の中に入って盛んにセキショウを集めては小舟に積みこんでいる。アヒルやブタの飼料にするらしい。黒い屋根で囲った水上生活者の舟も川岸にいくつかならんでいる。鵜飼の鵜も飼われている。広い川原が牛や山羊の放牧場になっているところもある。漓江は多くの人々の生活の場でもあった。2時間ほど下ってよいよ凹凸の激しい石灰岩の山塊が目前を通り過ぎていく。かって20年前数少ない中国映画でみた漓江の印象が現実のものとなって次々と現れてきた。そのスケールの大きさに、移り変わる山容の形に、迫りくる山塊の緊迫感に幾度となく心は昂ぶった。なお、この比類まれな景観がかっては海底の小さなサンゴが作ったのかと思うと神秘的ですらあった。

一方、双眼鏡で岩壁をにらみつけ、どんな植物が生えているか捜し求める。しかし、流れ下る船上からではなかなか判明しがたい。時々黄花のヒガンバナであろうか鮮やかな色で花を咲かせていた。岩肌には低木、草本はあるが高木は当然ない。視界が開けて山塊がなくなってくると川岸にバンブーが続き、またサワグルミが長く果実を垂れ下げて広がっていた。

昼食をはきんで約6時間、雄大な自然を満喫して終っ

た。陽朔には桂林のバスが来て待っていてくれ、その帰りの陸路もすばらしかった。遠々と広がる平原にニョキニョキと白い岩肌の山塊が突出し、急峻な山塊ほど白っぽく、緩やかな山塊は黒や緑に、なだらかな丘陵にはマツ林が広がっていた。未開の草原、畑地にはキャッサバ、水田にはイネの栽培が多かった。道路工事が多く、その工法は、全て一度掘り下げた路面に石灰岩を30cmも敷きつめているようだった。それも機械はほとんどなく荷車と人の手によって。

桂林の街路樹はクスノキが多く、キョウチクトウ、センダン、バンブー、ニセアカシア状のママ科などの他、モクセイ（桂）には4種があるそうだ。榕樹といってガジュマルの大木が数少ないが残されていた。

8月24日 定刻に飛び立つことの少ないという桂林空港から定刻の8時25分、鐘状山塊の林立するカルストを眼下に広州へ向った。

広州動物園は日本の動物園とは大きくことなり、森林公園の中に動物小屋が点在する感じで植物の観察園にも適していた。

双思樹、Ficus、モクマオウ、Cassia、アブラギリ？、白連とあったMagnolia、フトモモ科の水翁Cleitocalyx、オオハマボウ、紫薇花とあったTabebuia、刺竹、ユーカリなど、亜熱帯性高木が多い。

午後は再会した郭先生に松岡さんと二人で華南農学院大学を案内していただいた。隣には工学院大学もあり、広州では中山大学を筆頭に12大学があるとのことであった。学舎はレンガ作り、鉄筋、木造など新旧あり、建物も研究施設も整備はこれからのようであった。夏休みで学生はほとんど出身地に帰り、出会う人は学内に全てがあるという官舎の家族が多かった。

夕刻からは官舎の4階にある郭先生宅に招かれた。御主人は経済学のやはり教授、子供は3人で長男は工学院研究所勤務という学者一家である。大学特製のアイスクリームをいただいた後、夕食には草魚、絲瓜、シイタケ、牛肉とニラ炒め、アヒルの唐揚げ、鶏肉とパイナップルの炒め、猪肚と豆角の炒めなど大御馳走であった。郊外ではタクシーが拾いにくく、市バスで市内まで帰り、中国名「爽脆化皮杭」という固いオリーブの果実を砂糖漬けにしたような菓子を買って郭先生と別れた。ホテルは中国大酒店、この旅行で最も豪華なホテルであった。

8月25日 広州站で検閲を済ませ、残った中国兌換券を香港ドルに換え、9時40分発の直通車（特急列車で火車という）に乗った。広々とした水田地帯やマツコシタ群落とも言えそうな丘陵を抜けて香港九龍に着いた。入国手続きをして市内のレストランへ。中国本土とは違って何をすることもチップのいる世界。日本人にはわずらわしく住みにくい社会にみえた。最後の空の旅はキャセ

イ航空、きれいな台湾の浜辺や台風雲の上を飛んで、大阪に20時20分帰着。日華区系の植物に興奮し、勤勉な市民や素朴な少数民族のバイタリティに触れた9日間の旅の終りであった。みんながこんな研修団ならまた行きた

いという満足感と希望に燃えて解散した。

(追記 文内に書き記した植物の種名は標本の同定結果でなく、現地で観察した際の近いと思った種名である。)

昭和61年9月

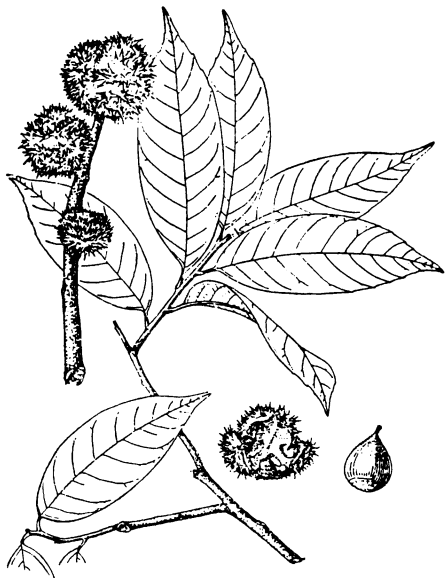


图828 (壳斗科)

毛果栲 猪栗, 毛锥栗, 扁栗

Castanopsis orthacantha Franch.

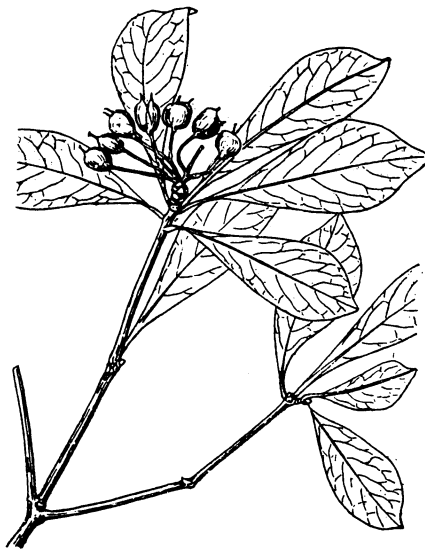


图2036 (海桐科)

菱叶海桐 山子仁

Pittosporum truncatum Pritz.

図は、中国高等植物図鑑による。



中国、雲南省、昆明の筇竹寺の社叢林で見たクリカシ